

**国公立大 前後期発表 ～3年生～**

今春入試における国公立大学前期日程・中後期日程試験の合格発表が行われました。53期生は最後まで粘りを見せて健闘し、数多くの生徒が栄冠を手に入れています。

2月25日(日)26日(月)に行われた前期日程試験の合格発表は、3月6日(火)～9日(金)にかけてありました。53期生は、九州大学4名、熊本大学15名、鹿児島大学70名、九州工業大学3名、横浜市立大学2名、北九州市立大学8名など、国公立大学の総計では131名が合格しました。

また、3月8日(木)に行われた中期日程試験、12日(月)に行われた後期日程試験の合格発表が、3月20日(火)～22日(木)にかけてあり、鹿児島大学9名をはじめ、国公立大学の総計では20名が合格しました。

現在のところ、国公立大学には推薦入試で合格していた3名を含めて154名が合格しています。多くの国公立大学中・後期日程の入学手続きが25日までに完了します。その後、大学によっては追加合格や2次募集が行われるため、国公立大学合格者の全容が判明するのは3月末になります。53期生の最終的な合格状況は、新年度4月発行の『進路指導室だより』等で改めてお伝えする予定です。

合格を勝ち取った53期生がいる一方で、涙を呑んだ53期生も少なからずいます。新2・3年の皆さんが来年、再来年の受験で合格を勝ち取るには、学力向上のための地道で弛まぬ努力が、今の時期から必要です。新年度を迎えるに当たり、自らの進路希望実現に向けて誓いを立てましょう。

53期生 合格体験を語る

3年生が1・2年生に大学受験・合格までの体験を語る「先輩と語る会」が3月16日(金)に行われました。前期試験で合格した11名の53期生が来て、体育館で後輩たちに向けて自らの体験を語ってくれました。後半は自由に質問を受ける形で行われましたが、受験勉強を進めるうえで苦労したことや具体的な学習方法、志望校の決定時期など、次々に質問が出ていました。

新年度に向けて ～1・2年生～

4月から54期生は3年生に、55期生は2年生になります。4月からの授業は、これまでの学習の基礎基本が身についているという前提で授業が進みます。4月に躓くと1年間苦労することになります。そうならないためには、春休みの課題に取り組みながら抜け漏れがないかを確認し、あればしっかり復習をしておくことが大切です。

入試問題のうち約50%が基本問題、約30%が応用問題、約20%が難問と言われています。受験の合否を分けるのは難問よりも基本問題です。今のうちに抜け漏れの無い圧倒的な基礎力を身につけましょう。

「受験生」になるための3ステップ**① 進路を決定しよう！**

「絶対〇〇大学に行きたい！」という強い動機を持つことです。本当に行きたい大学があれば、取り組み方も変わってきます。

② 入試までの流れを意識しよう！

入試までの流れをイメージし、いつまでに何をすべきか、ノートに書き出してみましょう。小さな目標を一つずつ達成することが大切です。

③ 基礎力を強化しよう！

受験勉強を始めるにあたって、最初に取り組むべきことは、基礎力の定着です。基礎力がなければ、入試問題を解くことはできません。

「なぜ学ぶのか？」

早いもので55期生の皆さんが入学して、1年が経過しようとしています。中央高校での1年間はどのような1年でしたか。「充実した1年だった」と胸をはっていえる人もいれば「何のために勉強しているのかわからない」という人もいるでしょう。「何のために勉強するのか」という問いを考えるヒントとして、明治の先人の逸話を皆さんに紹介したいと思います。

「私が1日休めば、日本は1日遅れるのです」

日本の土木工学の基礎を築いたと言われる**古市公威**（1854～1934 東京帝国大学名誉教授。男爵）。21歳でパリに留学。その猛勉強ぶりに下宿の女主人があきれて“公威、体をこわしますよ”と忠告すると、「私が1日休めば、日本は1日遅れるのです。」といったという。

「自分のために学ぶのか？」

吉田松陰や乃木希典の師として知られる**玉木文之進**（1810～1876 長州藩士）。幼い松陰が文之進の講義を受けている最中に蚊にさされ、頬をかくと、「今は公の為に学んでいる時なのに、頬がかゆいといった私ごとを優先するとは何事か」と叱責したという。

「誰かのためにがんばる」

明治の先人の逸話からは「公のために学ぶ」という情熱を感じます。現代の学びも同じです。皆さんが学問に励み、いずれ社会に出て働く。そのことで誰かが幸せになります。

人間は社会的な生物です。一人では生きていけませんし、誰かとつながりたいという根源的な欲求を持っています。そのため人間が幸せをもっとも強く感じるのは「誰かに必要とされる」ときです。「わたしは〇〇になって社会貢献する」という目標を早く見つけたいものですね。

オリンピックから学ぶ ― 満を持して54期生の登場 ―



4年という歳月は長い、それとも短い。五輪を目指すスポーツ選手にとって、たくまずして生まれた時間の妙と思える。ベテランと若手では受け止め方も違うだろう。

平昌五輪に出たスノーボードの国武大晃選手や岩淵麗楽選手はまだ16歳だ。採点を待つ間の表情やしぐさにあどけなさが残る。五輪という夢の舞台を現実にとぐり寄せ、飛躍の4年になった。

だが、同じ10代で五輪に出場した“先輩”には苦難が待ち受けていた。スピードスケートの高木美帆選手とスキージャンプの高梨沙羅選手である。厳しい4年間だったに違いない。

中学生でバンクーバー五輪を経験した高木選手は、前回ソチの代表から漏れた。金メダル確実と言われた高梨選手は、重圧から4位に沈んだ。その2人が平昌で表彰台上った。成長を示すメダルの輝きがまぶしい。

2大会連続の銀メダルとなったスノーボードの平野歩夢選手も、重みの違うメダルだった。選手生命が脅かされる大けがを経験し、「苦しいことばかりの日々だった」と言う。頂点に肉薄した自信と悔しさは、次の4年の糧になろう。

スキーモーグルで18歳から5回続けて出場した上村愛子さんの言葉を思い出す。一つずつしか上がらない順位に、「何で一段一段なんだろう」とつぶやいた。

全力を尽くしてこそその試練と栄光である。勝っても負けても、少しずつ前に進めばいい。

(2/15日付 南日本新聞 南風録)



壁を乗り越える

スポーツではどの競技にも天才少年・少女が出現します。スポーツの世界に限らず、将棋の藤井聡太・囲碁の井山裕太という2人の若い棋士も注目を集めています。ただ、素質に恵まれた才能が、そのまま大成することは稀で、多くは大舞台を踏むことなく消えていき、壁を克服した選手だけが、大輪の華を咲かせるわけです。

「1番を取れなかった悔しい気持ちがこみあげてきたが、自分の中で最高順位が取れたのは誇りに思う」（高木美帆）

「最後の最後で一番いいジャンプができた。自分はまだ金メダルを取る器でないことも分かった」（高梨沙羅）

本校での最後の年を迎える54期生の君たちが、いよいよ勝負の舞台に立ちます。54期には残念ながら、いわゆる「天才」は一人もいません。300余名全員が努力型タイプであることを考えれば、決して楽しい時間だけではありません。むしろ苦しくきつい時間の方が圧倒的に多いだろうということは容易に想像できます。先日の南日本新聞「若い目」の54期生の投稿にあったように、受験勉強・受験生活を楽しむことができればベストなのかもしれませんが、君たち全員が持っている夢や希望を実現しようとするときに、すべてが上手くいくことはまれで、現実的には大きな壁に幾度となく直面します。プレッシャーもあります。スランプも経験します。しかし、こういった君たちの力を試す大きな壁は、夢や希望を強く持っていて、しかも、それを実現しようという強い意志を持っている人たちにしか立ち上がることはないのです。自分の立ち位置をしっかりと認識して、時々立ち止まって、何をなすべきかを客観的に考えながら、一歩ずつ前に進むしかありません。長い時間をかけて、謙虚さを失わず、本当にきついことから逃げずに向かい合うことができれば、君たちにとっての大舞台で必ずご褒美が届けられるはずです。

「サムライ・ブルー」

日本では国を代表するスポーツ団体などのユニフォームには、日の丸の白・赤と同じくらい、青が多く使われます。サッカー日本代表のユニフォームなどは、その典型。「サムライ・ブルー」「ジャパン・ブルー」などと呼び、日本を表象するカラーの1つです。制服も含め、本校のスクールカラーがこの濃紺色。そして54期生の学年カラーは青。今年が明治維新から150年の節目の年。多くの偉人を輩出した加治屋町で学び、明治維新を牽引した薩摩の遺伝子を受け継ぎ、そして、「サムライ・ブルー」をまとう君たち54期生諸君が活躍しないはずがありません。先日の卒業式で53期の先輩たちの熱い思いを引き継いだ、54期生の大きな飛躍を見られる1年間になることを期待しています。